

こういう経験が忍耐力と人を信頼する礎になったものと当時を振り返っています。

剣道部で学ぶ

栗原政男（高26回）

卒業して既に三十年。高校時代を懐古する機会をいただいた事に感謝します。

先ず初めに思い出するのは、入学式で校長先生から「本校は県下唯一の男子校である。」と誇らしげに語られ、男子校としての校風が肌で感じられることであつた。

勉強については自信の程は全くない。しかし、剣道部の思い出は強く残っている。

同期八名と入部し、三泊四日の夏合宿を迎えた。稽古は早朝のランニング、午前・午後・夜間稽古と厳しく、食事のどを通らず、4キロも痩せる程であつたが、同期が協力し合つたからこそ乗り越え

ることができた。また、それ以上に指導に来ていただいた先輩方の多さと広い年齢層に部の歴史の深さに全く驚いたものである。蛇足ではあるが差し入れのスイカの美味しかったことが、今でも、鮮明に思い出される。

部の伝統を先輩から学び、先輩に伝えた「先輩を敬い、後輩を労わり、同僚を助ける」こと。今の自分を形成した要素となつていることは、確かである。

現在と過去

今から23年前の今頃、新入生の私が、学校帰りのバスに乗ると、最後列に座っていた三年生達（リーゼント・ドカン・ボンタン）に呼ばれ「まあ、座りなさい」と真ん中の席を空けてくれました。恐る恐る座ると「お父さんお家

でも怖いのか？」と聞かれ、「いえ、そんなことありません」と答えると「へえ、そうなんだ。僕達にはすつごく怖いんだよ」と言われました。そうです私は、体育科込山英雄の子供だったのです。

家では父でも学校では先生、とけじめをつけていた私は、柔道部の練習中に後輩が怪我をした時「先生を呼んで」と先輩にいわれ、職員会議中の会議室に走り、「コンコン」失礼します柔道部の込山です。込山先生に用があつてきました。先生方の視線が「一カ所に集まると、立ち上がりながら「おう！どこの子だ？」先生方は大爆笑！私は「ケジメつけるよ！」と心の中で叫びました。

そんな父も5年前に退職し、現在は、県柔連・地域活動（田原ふるさと公園）に意欲的に活動しています。

杉山長風先生の ご逝去を悼む

土屋毅（高4回）

人の世の「まさか」の無常は、いつも突然に訪れます。卒寿を前に、あの眼鏡ごし

の人なつこい笑顔に接したのは、平成十二年三月、弘法山山頂の前田夕暮の歌碑の解説板を、同窓会七周年記念事業として、新たに建て直したその完成披露の日でした。

思えば、昭和二十六年、創立二十五周年記念事業として、母校・郷土の歌人、夕暮を顕彰する第四歌碑の建立に奔走され、私達生徒と実現させた先生は、嬉しそうに、私が書いた解説文を、「立派な解説文だ」と、眼鏡の奥のキラキラした目で誉めて下さつた。先生の授業を受けた卒業生は、等しく「長風さん」のニックネームで親しんで呼び、

あの茶目つけと、ウィットに富んだ、時には駄洒落を交えた独特な授業は、誰の胸にも鮮明に焼きついています。

先生は、「長風」の雅号で歌人・書家でもあり、昭和二十年代、先生の指導で夕暮が主宰した歌詩「詩歌」の結社「白日社秦野高校支社」を結成、投稿や歌会のサークル活動を通じ、「その時の出逢いが、人生を根底から変えることがある」「相田みつを」の言葉の如く、私も教師の道を歩み、歌の世界に遊びました。先生は、教師・歌人・書家として、日本歌壇・地域での文化振興にと貢献され、功を成し名を遂げいま、不帰の客となられました。計り知れない薫陶を受けた教え子にとっては、惜しむべくもありません。悲しみは筆舌に尽くせません。心からご冥福をお祈りします。安らかに眠り下さい。